

【レッド・ウィング物語】

RED WING

グレートブランド物語

Great Brand Story

第19回:文と構成 / 河村喜代子



「ザ・シューマン、靴人間」と自分呼んだチャールズ・ベックマンは革の精魂を学び、のちに靴店を開いて販売をした。製造に乗り出してからも彼の過ごしてきた時間がレッド・ウィングの靴づくりに活かされた。靴を大切に、それも使う人の側から考える視点を失わなかったのはセールスの経験があったからか。

レッド・ウィングがヘリテージと呼べる数多くのワークブーツを現在に手渡すことができたのは、時代が求める正しい道具を届けてきたからだ。アメリカの製造業が海外へ移転していったのはずいぶん前からだが、レッド・ウィングはミネソタを100年動かさない。

レッド・ウィングの創立は1905年である。創立者チャールズ・ベックマンはドイツ北西部に生まれ17歳でアメリカへ渡った。移民1世として、彼が選んだ場所は、北欧や同じドイツからの移民が多いミネソタ州東部の町レッド・ウィングだった。ミシシッピ川の蒸気船が町と外界をつなぐ動脈だったが、ベックマンがくる直前にミネアポリスから伸びてきた鉄道がなくなり、船から列車へと

切りかわろうとしていた。レッド・ウィングの土地でベックマンが最初に住んだのは、革なめしの工場だった。その工場を営んでいたSBフットとは、ベックマンが終生を通じてつきあいをすることになる人物だった。革なめしの仕事をひととおり学ぶと1883年には店を開き、以後20年間にわたって50万足の靴

を売上げたのだという。靴を売る仕事には熱心に取り組んだが、どうしても飽き足らない部分があったのだらう。自分でつくった靴を売りたいか、温めてきた考えを行動に移すときがきた。地元仲間14人を集めレッド・ウィング・シューカンパニーを設立。1873年にその土地で列車を降りてから32年の時間が過ぎていた。50歳

を目前にしたベックマンは朗らかに宣言している。「わたくしベックマンは靴人間。長年ブーツやら靴を販売してきました。ですが靴を売るのにはもうやめるつもりです。やることにしたら、たからず。」
※(Heart and Sole)



レッド・ウィングのファーストブーツ。1905年製造。



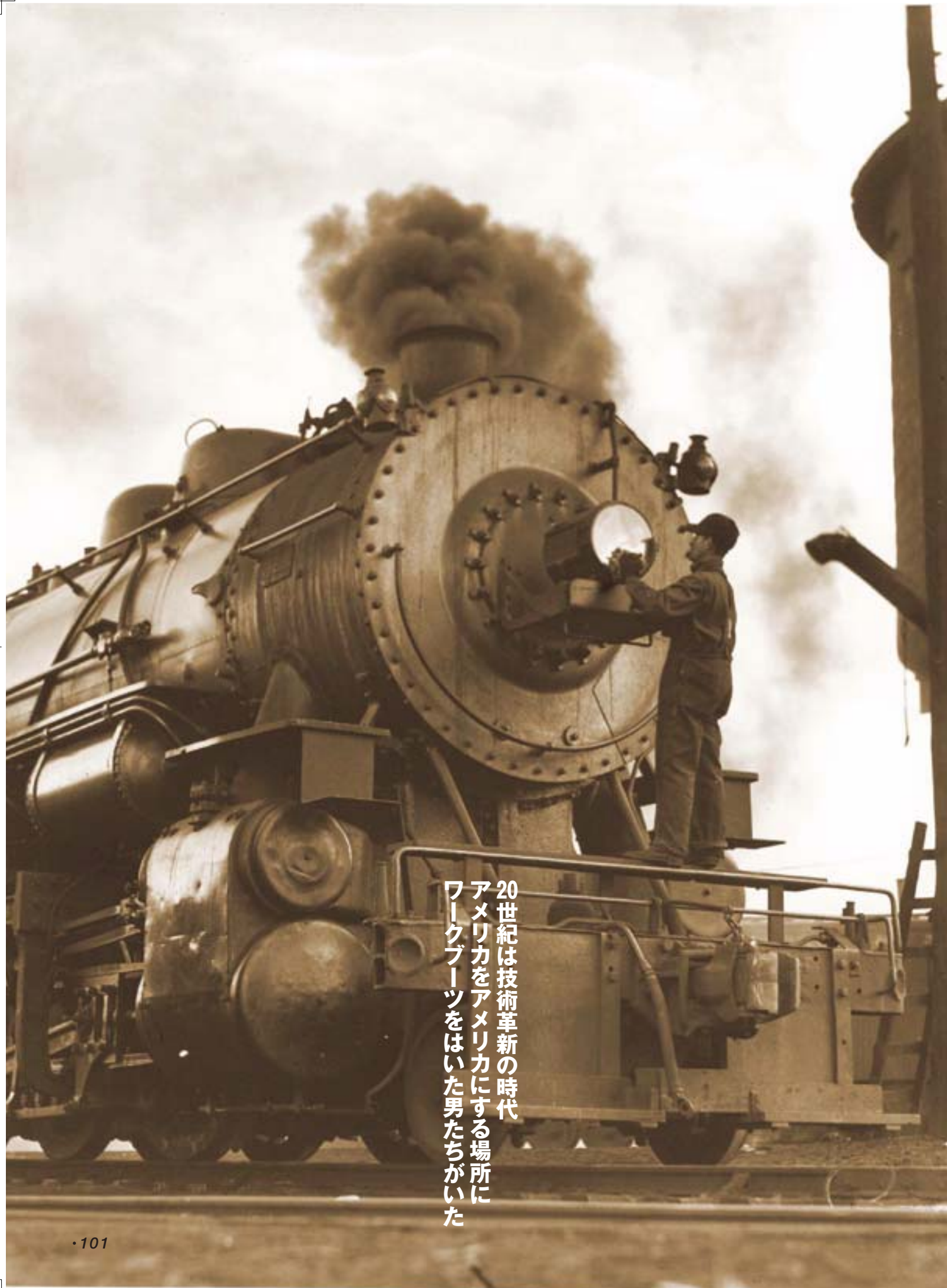
1900年当時のミネソタ州レッド・ウィングの町。ミシシッピ川が流れ、豊かな森林資源に恵まれた土地では製材業や木材を燃料とした製陶業が発達していた。そこで働く男たちの足元をワークブーツがぐっすり支えていた。チャールズ・ベックマンはこの町で靴の販売店を営んだ。その後、靴づくりに乗り出し1905年、記念すべき製品第1号ができあがる。それが上のブーツである。編み上げ部分とバックルを組み合わせ、ワークブーツとは機能を備えたツールであることを高らかに宣言していることが伝わる。

Photo/Courtesy of Red Wing 98



ミネソタ南東部のミシシッピ川沿い一帯に暮らしていたダコタ・メワカントン族の酋長は代々、白い鳥の羽を赤く染めて身につけたことからレッド・ウィングと呼ばれた。レッド・ウィング市は1857年にその名をとり市名にした。酋長のレッド・ウィングは戦いと狩りに秀でて優れたリーダーだった。彼には予知夢を通して、先を見通す特殊な能力があったからだとされる。





20世紀は技術革新の時代
アメリカをアメリカにする場所に
ワークブーツをはいた男たちがいた



1907, pp. 3, 6 and 8; an unorthodox shoe appeared in this catalog. Note: The traditional method of cutting a leather toe cap is a technique common to most today.

Mr. Mer's Closed Crib (Shoe), Fig. 3, Shows the Mer's toe cap and laces.

Mr. Mer's Double Sole (Shoe) Fig. 6, Shows the Mer's double sole and laces.

Diagram of steel safety shoe construction, RWSC Catalog, 1929-40, p. 23.

This is the cold-rolled, steel safety toe box used in Red Wing Safety Toe Shoes. It's been tested and has successfully passed innumerable laboratory and field tests.

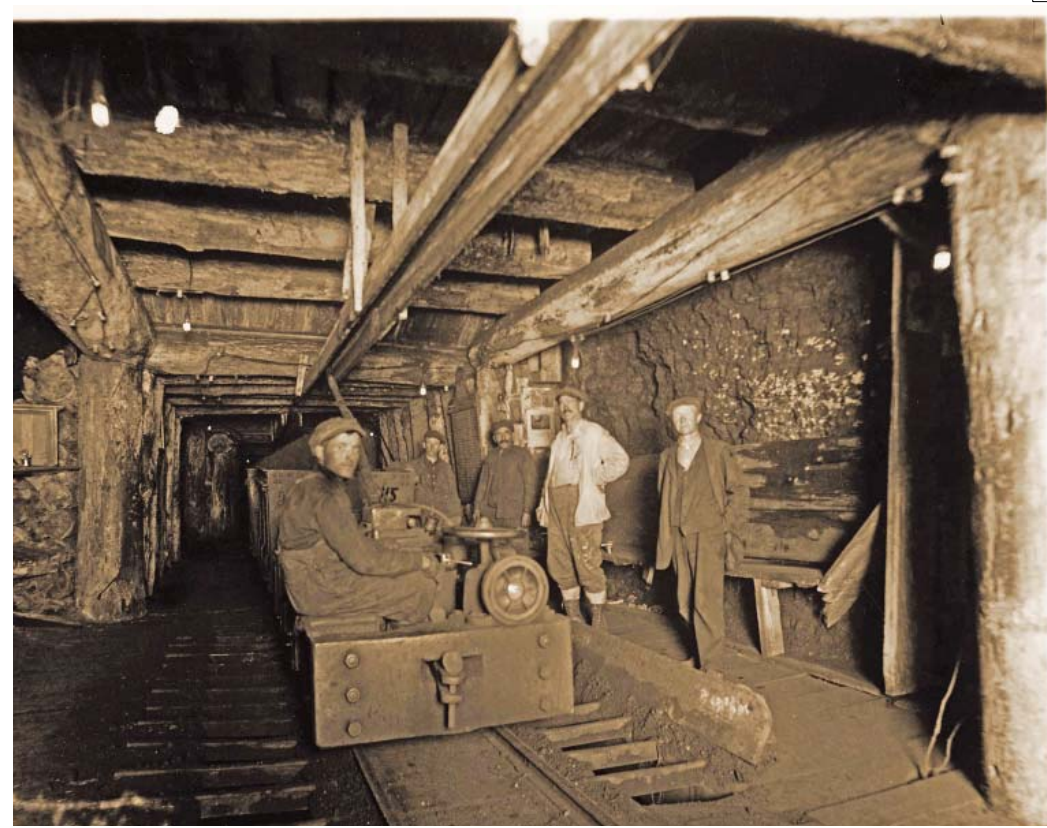
鋼鉄のキャップを入れたスティール・トゥのブーツは、ハイリスクな仕事場で用いる安全靴。1930年代には機能性を高めた靴を必要とするワーカーに向けたモノづくりをはじめた。それ以前には、つま革を二重にしたキャップ・トゥのモデルがあった。それは消滅することなく現在のアイアンレンジ・ブーツとして受け継がれている。



天空から地底まで20世紀初頭のアメリカは、ワークブーツで足元をかためた男たちの時代だった。

1918年には、レッド・ウィングは第1次大戦に参戦したアメリカ陸軍のために、軍のスペックにしたがって製造したアーミーブーツを納入した。軍との契約は支払いが確実なのだが、相手にする足のタイプがさまざますぎる。それを満足させなければならぬ。第1次大戦だけでなく、レッド・ウィングは第2次大戦でもコンバットブーツを納入しているが、サイズと幅の違いを数えると239種にも上った。

靴の機能は外観だけでは見えてこない。とくに足へのなじみは個人によって大きく左右される。また靴底の構造はクッション性と耐久性と相反する要求に応える技術が必要になってくる。ソールは水やオイル、あるいはその混合や、ぬかるみなど、接地する条件に応じたグリップ力が求められる。それに不備があると一日の終わりに、疲れとなって返ってくる。

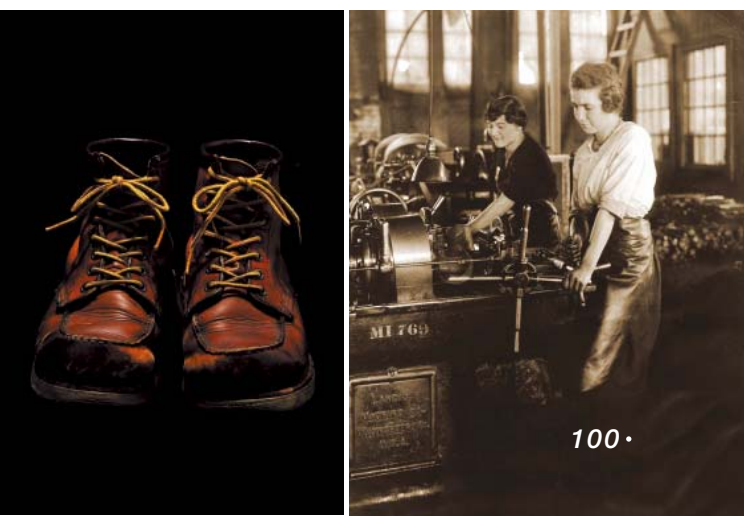


機能する靴、ワークブーツ そこに靴づくりする力を 正しく傾注する場所があった

レッド・ウィングの長い歴史のなかからは、傑作ブーツのモデルがいくつも生まれている。けれど使う道具であるモノは、芸術作品とはちがって最初から傑作としてこの世に送り出されてくるわけではない。そのモノが必要とされる場所と時代、靴なら実際にそれを歩く人間といったすべてのピースが正しい場所にぴたりとはまらなければならぬ。求められるニーズを満たす必要がある。しかもこのニーズというものには少々クセがある。まず、これが必要だと明言されているわけではない。求めに応じたはずだと思っても、あてが外れることもある。あるいはモノができて差し出したときには、すでに心がよそに移っていることもある。ニーズとは移り気なところがあるのだ。それによって、傑作と呼ばれるからは、モノとしての寿命が長くなければならない。同じモノがいつでも買えなければ困るのだ。だから傑作とは、ある程度は計算できる部分はあるにしても、つくろつと狙ってつくれるモノではない。決めるのは

いつもでも使う側にいる人間である。つくる側でコントロールできる部分は少ない。

レッド・ウィングがやったことは、自分たちの靴をはく人を特定して、彼らの仕事に的を絞った靴づくりをしたことだった。最初から機能を強く意識したモノづくりをしたのだ。それがワークブーツだった。1912年当時のレッド・ウィング市があるミネソタ州は、小麦の生産で全米のトップクラスに入っていた。周辺には農家や牧場





Style No. 9011 ベックマン・ラウンド、はきこむ毎にレザーは深みを増す。レザー：ブラックチェリー「フェザーストーン」、ソール：レザー&ラグ、価格：3万8220円



Style No. 9013 ベックマン・ラウンド、このコレクション用の高品質レザーを使用。レザー：チェスナット「フェザーストーン」、ソール：レザー&ラグ、価格：3万8220円



Style No. 8875 6インチ クラシック・モック、ソールはレッド・ウィングの顔、白底を搭載。レザー：オロ・ラセット、ソール：トラクション・トレッド、価格：2万9820円



Style No. 8111 アイアンレンジ、キャップのようにつま先の革が二重に。レザー：アンバー「ハーネス」、ソール：ブラウン・ニトリル・コルク、価格：3万3600円



Style No. 9177 ボート、ソールの波形の切れ込みが濡れたデッキで真価を発揮する。レザー：ネイビー「ボーターズ」、ソール：ボート、価格：2万3940円



Style No. 9176 チャッカ、甲をしっかりとホールドしてくれるクラシック感溢れるブーツ。レザー：オロ・イジナル、ソール：ビブラムミニラグ、価格：2万9820円



モノづくりする国だったアメリカが現代に伝える機能するギアとは

かかとの段差がない白いソールで、つま先が少し反り返っているブーツを見ると、ああレッド・ウィングだなとすぐわかる。白底と通称されているトラクション・トレッドのことだ。このソールを採用しているモデルには、モカシン・トゥー・クラシックとソのバリエーションであるランバー・ジャック。ラウンド・トゥー・クラシックに、ラインマンがあり、エンジン・ブーツとベコスにもこのソールを使うバージョンがある。いまでは当たり前でも、最初にランバーソールを導入すると決めるには勇気がいったことだろう。靴づくりは職人技、伝統技術が占める割合が高く、使う道具にしても製法にしても保守的な傾向が強い。それが素材となれば、

こだわりの多い、信念や信奉に近い強い思いがあったことは簡単に想像がつく。そこでは天然皮革が最高位に据えられている。素材は寒暖の差が苦手だ。そもそもミネソタは、零下30度などという極寒を記録する土地なのだ。苦手はまだある。油や熱、さまざまな薬品への耐久性にも懸念があった。決断したのは当時の社長スウィージーだった。時代はまだ1930年代という早さだった。現在のトラクション・トレッドによるソールが搭載されたのは1952年だが、そこにいたるまでにはグロコッドやキングピーといったヘリテージ・モデルを経ていた。今でも運に恵まれればスワップミットなどで過去のモデルを見かけることがある。ただし化学に由来する素

材を選ばないこともある。ソール内部に入れてクッションの役割をするコルクは天然物を使い、つけている。ブーツをはく人の足型に自然となじむかたちになり、同時にいつまでもへたらず復元力をキープできる点で、どうしてもコルクに代わるものはないと判断したからだ。モカシンスタイルのハインティングブーツがつくられたのも1930年代だった。これは1952年にはオロ・ラセット・レザーを使用するNo. 877のベイスとなり、万能ワークブーツとして高い評価をうけることになる。現行モデルではクラシック・モックのNo. 8875などにつながる。同じクラシックシリーズにあるラウンド・トゥーと並んで、これらはまさにヘリテージだ。レッド・ウィングの過去から現代に届けられた豊かな贈り物である。

レッド・ウィングのヘリテージに該当するモデルには、このページで紹介する高所作業用を張り渡す作業をした男たちがはいたラインマン・ブーツ、地底の坑道に入ってから石炭を掘った男たちのためのアイアンレンジ・ブーツ、南部テキサスの牧場で働く男たちに向けたベコス・ブーツなどがある。長い歴史をもつブランドの利点のひとつは、モノを通して過去の時間を共有できることである。つくり手の顔を知らなくても、製品がつかられてきた場所へ足を運ぶことができて、モノを前にするとそれを送り出した人たちのすぐそばへ立ち帰るような気になせられる。それはその製品の背後から、それが生まれることになった時代が立ち上がってくるからにちがいない。グレイトブランドの傑作品だけにできることだ。



Style No. 877 8インチ クラシック・モック、ハンティングブーツを基本に1952年に誕生。レザー：オロ・イジナル、ソール：トラクション・トレッド、価格：3万5700円



Style No. 2268 エンジン、当初鉄道機関士向けに1938年に開発。レザー：ブラッククロム、ソール：ブラック・ネオプレーン・コード、価格：3万8850円



Style No. 8159 11インチ ベコス、テキサスの地名で呼ぶモデルは1953年生まれ。レザー：アンバー「ハーネス」、ソール：ブラウン・ケミカル・コルク、価格：3万2970円



ひと度はいてしまえば目に入ることのない靴底、ソールはブーツの実力を支えるツールそのものだ。レッド・ウィングを代表するトラクション・トレッド、いわゆる白底は足裏のアーチを確実にサポートすると同時にグリップ力はそのままにかかとのひっかかりを排除。これにより転倒する恐れから解放され、建設現場や高所作業する者たちからこのソールは高い信頼を集めた。自分が目的とする行動、自分が行う仕事にふさわしい正しいソールを選び取ることは一生モノとしてのブーツを機能させることにつながる。

©レッド・ウィング・ジャパン 03-5791-3280 <http://www.redwingshoe.co.jp/>